

え、そんな風に思ったことない。全然。依頼があったらうれしい。時間のやりくりが大変なだけで、頼まれると基本うれしいの。というの、仕事がなかったスタートラインの感覚を忘れないから。初めて組織の外に出た、あの心細さといったらなくて、ひとりぼっちで神保町とかいろんなところまよった。かわいそうだったー(笑)。その頃の自分にウイックしています。「大丈夫」ってね。

—未だ初心を忘れていないのですね。そういえば、若い頃に松本先生や猪熊先生に学んだだけでなく、60代でも荒井良二さんの絵本講座(※6)に通ったとか。

そうですね。荒井先生の絵本が大好きで。荒井先生もね、教えるより、自分で気付かせるやり方。白い紙に向かって、考える前にとにかく手を動かして、カラーコピーなんか頼るな、何枚でも描けよ、と。だから「何も考えずに手を動かせばいいんですね！」と喜んでいたら、「田村さん、ちょっとは頭使ってね」(笑)。すごくいい絵

が描けてもそこに安住しないで、どんどん変えて。尊敬しています。荒井先生も私の師匠です。それから、ささめやゆき先生。絵も素敵なんですけど、文章もお上手で、どこか知らない国に行つたみたいないい香りがします。けどとても謙虚な方なの。ほかにも、お若い方でも個展なんか見に行くと、すごく参考になるし、刺激になりますね。素敵だなと思った作品を思わず買うこともあります。

—その刺激でまた新たな創作意欲が。

そうですね。自分なりに集めた情報とか経験のシャワーを浴びて、マッサージしてもらつて、そんなものね。気が付いたらメモして、それを見ます。最近では「勝手に向上心は迷惑です」というのがあって。昔の絵はへたで恥ずかしいから描き直したいと私が言ったら、「その絵が好きだった自分の気持ちはどうなるのか。勝手な向上心で修正されては迷惑です」と言った人がいて。私の絵日記教室(※7)の生徒さんなんですけどね。

—「勝手な向上心」!

名言でしょ。マンネリは嫌だから、自分の壁を越えようと一所懸命努力するんだけど、つたなかつた頃に愛された絵も続けて、両方やっていこうと思って(◆9)。

—昔もいまも、どちらも大事に。

そう。もう死にそうになつて気が付いた(笑)。いまはね、寝たきり老人になつたら、ベッドで寝たまま絵を描こうと思つて。どんな絵になるかしら、とか思つての。ちょっと楽しみ。

—いいですね。田村さんの作品は、雑誌や本の挿絵をはじめ、詩、エッセイ、絵本、雑貨とさまざまありますが、ご自身では肩書きは何と思つていますか。

いつのまにか「イラストレーター」と付いてるけど、ちょっと長いな(笑)。昔は「挿絵画家」とかね、「画業」っていいじゃない? クラシックで、「画業」ね。でも、肩書きなんて!! 素人のままだし。フリーターのままだし。まだまだ新人だし(笑)、まだ肩書きは見付かりませんね。



田村セツコ展

85歳、
少女を描き続ける
永遠の少女

2023年1月6日(金)~
3月26日(日)

2012年以来、弥生美術館で開催される2度目の田村セツコさんの個展。世代を超えて親しまれている童話などの装画・挿絵や「セツコグッズ」を中心とした「少女の部屋」、イラストエッセイや思い出の品を中心とした「おばあさんの部屋」をおして、作品と共に「進化し続けるすてきなおばあさんで、永遠にあの頃の少女である」作家本人の魅力とその背景をたっぷりと感じられる貴重な機会です。

休館日	月曜日 *ただし、1月9日(月・祝)は開館、 1月10日(火)は休館。
開館時間	10:00~17:00 *入館は16:30まで。
料金	一般1000円、大学生・高校生900円、 小学生・中学生500円 *同チケットで隣接の竹久夢二美術館も 観覧可能。
開催地	弥生美術館 〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-3
ウェブ	https://www.yayoi-yumeji-museum.jp

* 田村セツコさんの作品は、複製品やグッズなど、さまざまな形で展開されています。また、グッズは在庫限りです。お問い合わせは、弥生美術館までお願いいたします。



トートバッグのほか、缶バッジやメモ帳、ステッカー、定期入れなど多数のグッズが販売される予定です。お楽しみに!

※6 「荒井良二 ぼくの絵本塾」……朝日カルチャーセンター横浜(神奈川県)にて1999年から11年間ほど開催。
「ようこそ! 田村セツコのハッピー! 絵画くらぶ」……池袋コミュニティ・カレッジ(東京都)にて開催中。

◆9 深みのある背景にレースベーパーをコラージュ。メモ帳片手にどんな楽しいことを思い巡らせているのだろう。「まだまだ新人」(一)の田村さん最新作(2022年12月上旬現在)。

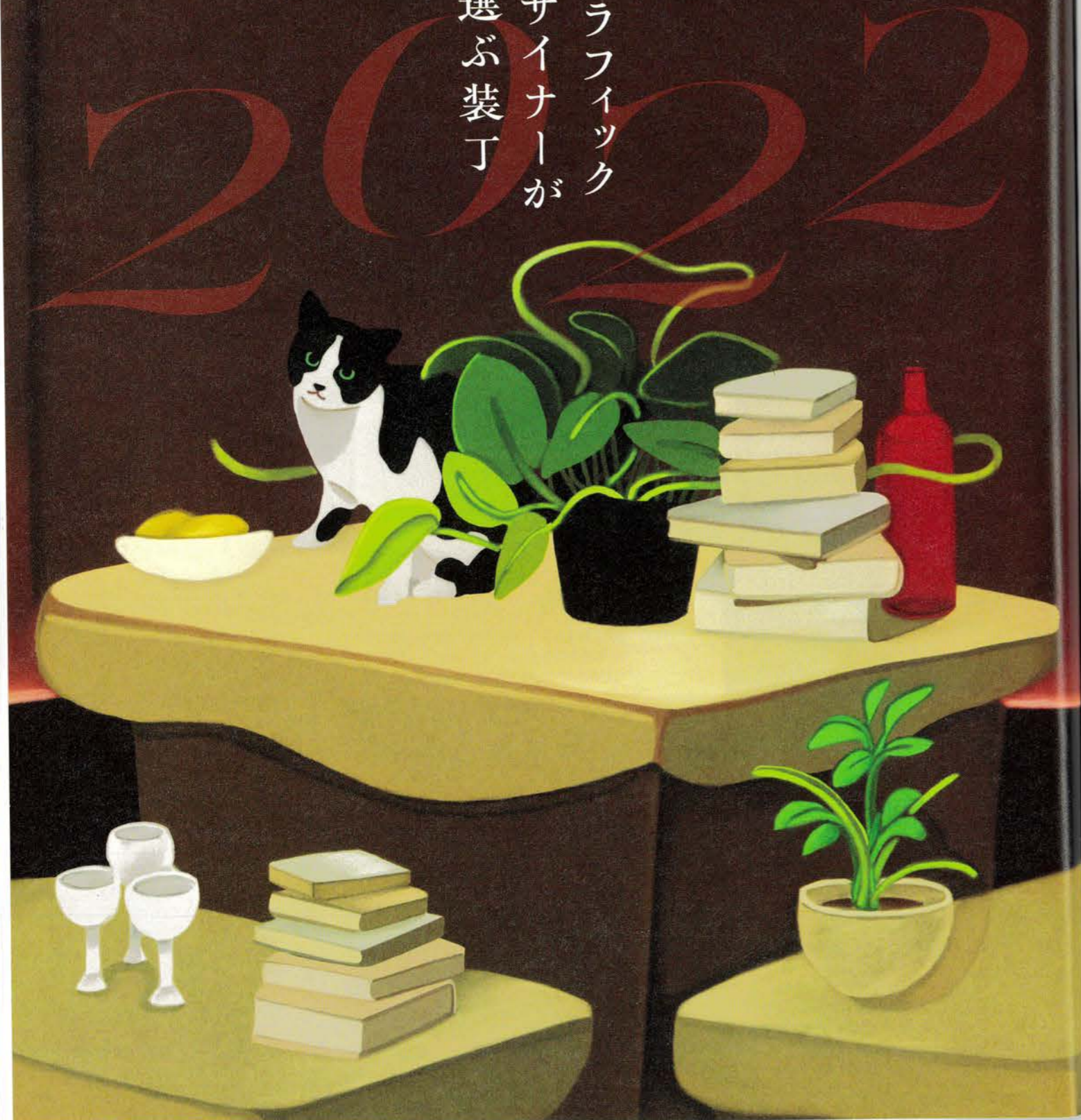


“もの”としての本に不可欠な「装丁」。それは、綴じられた物語や作品の魅力をより引き出したり、時には愛着をさらに増幅させたりもする。2022年も7万点もの書籍が刊行された。膨大な数の中から、それぞれのグラフィックデザイナーは何に注目し、どの装丁をセレクトしたのだろう。

グラフィック デザイナーが 選ぶ装丁

※本特集は2022年に発刊された書籍から選書されました。ただし、選書の希望により一部発刊年が異なります。スタッフクレジットは本誌誌末クレジットに準じ、著者が装画を手がけている場合には省略。また、選書からの指定がある場合を除き、書影は基本的に帯のない状態で掲載しています。

田・長谷川海



装丁家というのは、本との出会いに関われる、なんなら人の思い出にだって関われる仕事だと思ってる。私は児童書の装丁を手がけることが多いので、子どもの時の出会いを本作りの基本にしているのだが、ポテンシャルの高さを活せてない本にモヤモヤしたこと、大人っぽく美しい本に背筋を伸ばした時の気持ちは忘れられない。今回書店回りをして、いろんなデザイナーの職人的な上手さや工夫に唸ったり、関わった人たちの愛情をしみじみと感じたりもした。やっぱりものとしての本はいい。触れる、めくられる、匂いがある、喜びがある。オンライン打ち合わせが当たり前になったここ数年、画面越しの味気なさを知って、ますます、身体や物体が纏うものや、そこに存在することの代え難さを感じるようになった。画面で読む文章は、記憶はできて、思い出しにはならない。紙の本は共にいてくれる。偏愛かもしれないけれど、私はそう思っている。

総評

『マダム・エドワルダ』

ジョルジュ・バタイユ 著 阿部静子 訳(月曜社)
造本設計: 太田明日香

しっとりした黒の紙にぼうっと灯りがともる。赤の箔押しが妖しく光り、ちらと表紙の赤がのぞく。この本の幅の狭さも、存在感を後押ししているのだろう。書棚の奥まった本の間から、誘惑されたような気持ちになった。



世界探検全集

- 01『東方見聞録』
- 10『世界最悪の旅』
- 16『石器時代への旅』

(01)マルコ・ポーロ 著 青木富太郎 訳
(10)アプスレイ・チェリー=ガラード 著 加納一郎 訳
(16)ハインリヒ・ハラー 著 近藤等+植田重雄 訳
(河出書房新社)
BD: 大倉真一郎 装画: 竹田嘉文

クラフト紙の使い方がイイ。着彩した線画のイラストが懐かしさと現代性を感じさせ、読んでみたくなる。コストを抑えつつ、新しい読者を獲得する試みへの、デザイナーからの軽やかな答え。各著者肖像もお楽しみ。



アルト・コレクション I『ロデーズからの手紙』 II『アルト・ル・モモ』 III『カイエ』

アルタン・アルト 著
(I) 宇野邦一+鈴木創士 (II) 鈴木創士+岡本健
(III) 荒井潔 訳(月曜社)
装丁: 中島浩

狂気を孕むようなアルトの絵を組み合わせ、風合いのある紙をグロスPP加工に落としこむことにより、光を反射させ独特な質感を生み出している。狂気の炸裂する詩的な書簡という言葉にも相応しい、美しい装丁だと思う。



『となりの谷川俊太郎』

谷川俊太郎 著 田原編(ポエムピース)
装丁+装画: 鈴木千佳子

手に取る本に鈴木千佳子さんの名前を見つけることが多い。これもその1冊。色使いが上手で、感じよく、親しみやすく、落ち着いて、いい佇まいをしている。場に馴染んでしまうところが、実に「となりの」っぽい本。



『オーヴェル』

レイモンド・ウィリアムズ 著 秦邦生 訳(月曜社)
装丁: 町口寛
装画: ジェームズ・ボズウェル『Street Scene』

オーヴェルについて語ることはできないけれど、しなやかな表紙に、エナメルのようなコート紙のカバーと、ジェームズ・ボズウェルの絵。もう、それだけでいいや。

中嶋香織が選んだ5冊

Selector

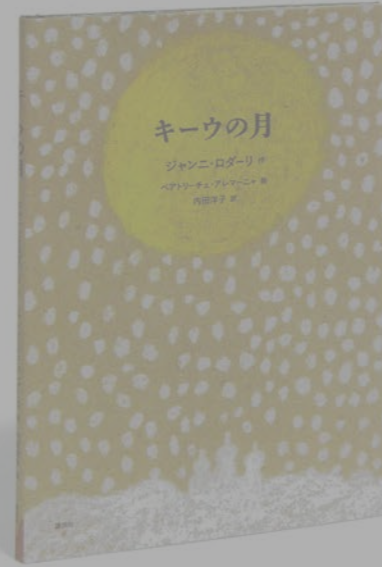
中嶋香織

NAKAJIMA Kaori



多摩美術大学デザイン科インテリアデザイン卒業。ものとしての本を好み、装丁家になる。
http://www.nakaori.com

中嶋香織の仕事3冊



『キーウの月』

ジャンニ・ロダリー 著
ベアトリーチェ・アレマーニャ 絵
内田洋子 訳
(講談社)

ウクライナ救援のための絵本。原書カバー絵が腑に落ちず、日本語版のみの提案をしたところ、翻訳者・内田洋子さんが熱心に版元を説得してくれた。余白のある絵は、ロダリーの詩と日本の感性に響くんじゃないかと思う。

上製本(A5判変型/角背)
●カバー……b7トラネクスト(四六判99kg)
CMYK+マットニス
●帯……OKトップコート(四六判110kg)/特色2色
●表紙……b7トラネクスト(四六判99kg)
CMYK+マットPP
●見返し……b7バルキー(A判57.5kg)/CMYK
●本文……b7バルキー(A判57.5kg)/CMYK

『赤毛のアン』

L・M・モンゴメリ 作
村岡花子 訳
(講談社)
装画: 北澤平祐

大切に持ち続けたい本というコンセプトで1冊目の若草物語を作った。これはその第2弾。扉には歓喜の白路、そこを抜けるとグリーン・ゲイブルズ。いつもよりお行儀のいい北澤平祐さんの絵が、読者を物語へと誘う。

上製本(四六判/丸背)
●カバー……b7ナチュラル(四六判99kg)
CMYK+グロスニス+スミ箔押し
●帯……シール/特色1色
●表紙……TS-1(N-9・四六判130kg)
特色1色+マットPP
●見返し……TS-1(N-9・四六判130kg)/特色1色
●扉……ミューズコットン(白・四六判73kg)/特色1色
●本文……ソリストミルキー(65g/㎡)/K
●花布……伊藤信男商店(97)
●スピン……伊藤信男商店(24)



『若草物語I&II』

ルイザ・メイ・オルコット 作
谷口由美子 訳
(講談社)
装画: 北澤平祐

2019年刊行の第1弾



『りすとかえるのあめのたび』

うえだまこと 作
(BL出版)

まずは外から、絵本の世界の音に耳をすませます。リズムや吐息を聞き逃さないように。そして中に入って少しだけ色彩を足し、また外に出て包みこむよう仕立てあげる。時にはこぼれ落ちるものささも読者に届くようにと作っている。

上製本(218mm×260mm/角背)
●カバー……ハミング(B判116kg)/CMYK+マットニス
●帯……ハミング(B判116kg)/特色2色+マットニス
●表紙……ハミング(A判77kg)/CMYK+グロスPP
●見返し……上質紙(菊判93.5kg)
表: 特色1色 裏: 特色1色
●扉……ハミング(A判77kg)/CMYK
●本文……ハミング(A判77kg)/CMYK